

渡辺克己 著

豊後の
武將と合戦

【第十四章】島津軍の豊後侵攻 ②



●原著案内

本デジタルブックは、以下の書籍「豊後の武将と合戦」をデジタル化したものです。

「豊後の武将と合戦」

著者：渡辺 克己

A5 版 314 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2000 年 2 月 15 日

定価：2300 円（税込み）



購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
電 097-538-9662 「合同新聞の本」 Web ページ

※奥付け／デジタルブックについて

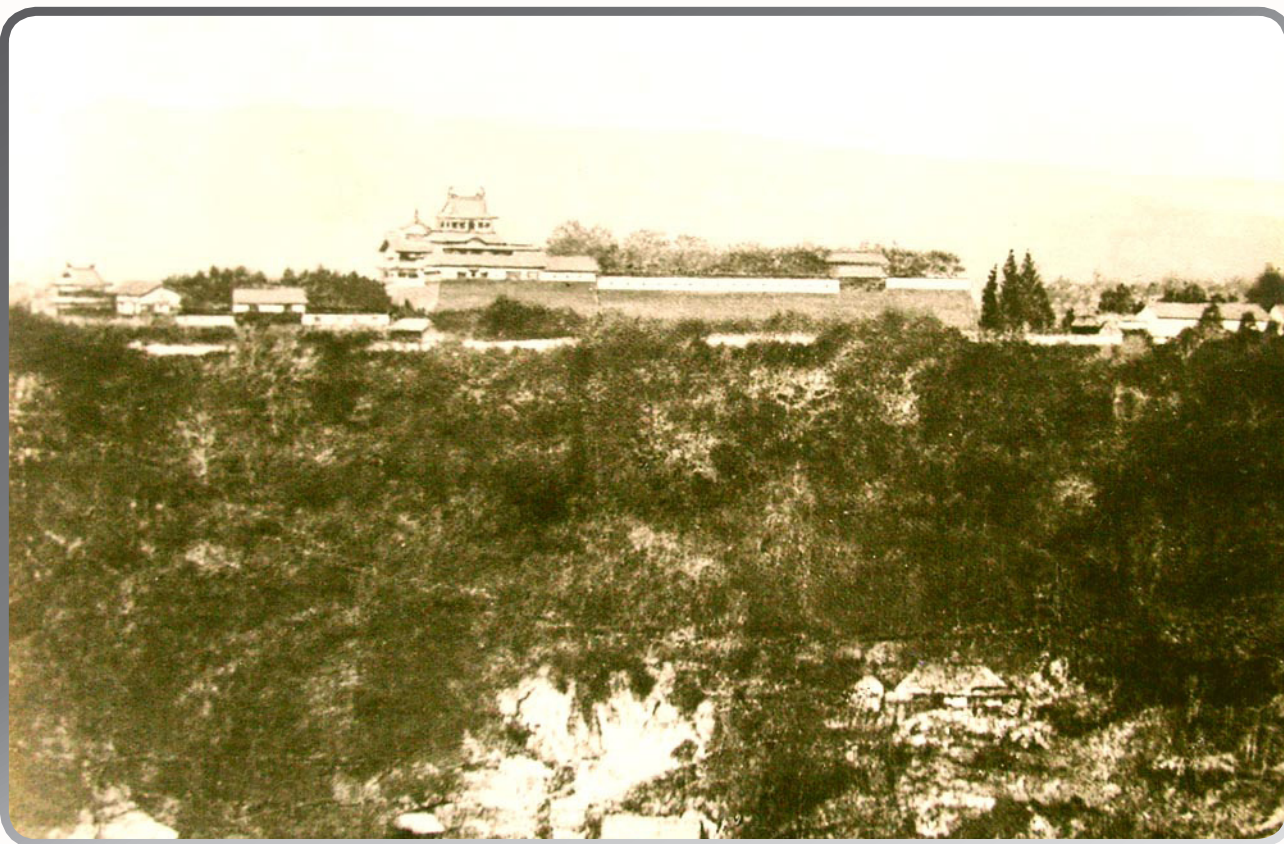
（題字と挿絵は二紀会委員・菅久）

目次

【写真】 明治元年の岡城（荻町の工藤重光さん提供）

第十四章 ●島津軍の豊後侵攻 ②

- ⑦ 哀れ朝日岳城主
- ⑧ 岡城の若武者
- ⑨ 鬼ヶ城の決戦
- ⑩ 柵牟礼城の攻防
- ⑪ 堅田合戦の勝利



明治元年の岡城（荻町の工藤重光さん提供）

⑦ 哀れ朝日岳城主

— 寝返りの代償は大きく —

朝日岳城は、国境の峠、梓越（あずさごえ）を見下ろす位置にある要塞（ようさい）である。宗麟が島津の来襲に備え、天正十年（一五八二）に築城させたもので、野津郷の郷士柴田氏の惣領・紹安が築城の命を受け、南郡三本松円福寺権大僧都有栄法印の助言を得て竣工（しゅんこう）し、在番を命じられていた。

柴田紹安が島津方に寝返った理由はこうだ。

野津郷の柴田氏の庶流である柴田礼能を宗麟が側近に取り立てて重用し、国東の親貫の乱の際には、宗麟の次男親家に付けて国東の経営に当たらせるなど、礼能の活躍がはなばなしく目立っている。これに比べて、柴田本家の紹安は、わずかな兵をもって辺境の城をあてがわれ、しかも島津が大挙来襲すれば、落城と討ち死には火を見るよりあきらかだ。いわば消耗品扱いだ。そんなわけで、柴田の惣領をないがしろにされていることを恨みに思っていたというのである。

これは礼能と紹安を対比して、後世寝返りの理由を創りあげたのではないか。やはり南郡諸城主がそうしたように、義者は不仁者のために死せず、

の道を選んだとみるべきだろう。



島津勢は、柴田紹安の手引きで、無人の野を行くように三重郷に侵入、十一月二十日ごろには松

尾山の砦に入り、三重近郷を手中に収めた。さらに緒方の小牧城も攻略し、府内進撃への足場を固めていった。

紹安は妻子や一族郎党を野津院の星河（ほしが）城に籠（こ）もらせ、自らは島津軍の一手を案内して天面山（大分市河原内）の砦に入った。ところが紹安の寝返りを知った佐伯の梶牟礼（とがむれ）城主・佐伯惟定（これさだ）が、十二月四日に星河城を攻略した。城は持ちこたえられず落城し、妻子一族は殺された。これを知った紹安は後悔し、天面山の砦を脱して大友方へ走ろうと企てたが、島津の手の者に気付かれ、捕らえられて斬（き）られた。哀れな最期であった。

こうして島津軍は、豊後の諸将の多数の犠牲のもとに深く侵攻していった。

大友義統が、仙石ら四国援軍の協力を得て豊前に反乱軍討伐に出動しているすきに、島津軍は豊後に侵入したと述べたが、たとえ義統が府内を留守にしなくとも、島津軍はたやすく侵入し得ただろう。肥後、日向の両国から島津軍が来攻することは予知されていたのだから、この国境へ総力を集中し、少なくとも国境を越えさせない作戦をとって、秀吉軍の来援を待つべきであった。それもなし得ず、数百ないし千人足らずの守兵しか持たない弱小の城にゆだねて、万を越える島津軍の越境を放置していたのだ。島津の大軍が豊後の各城を、やすやすと各個撃破して深く侵入するのは当然であった。

以上、島津軍の豊後侵攻の緒戦の様子を見てきたが、豊後国内にも、断固として島津軍に屈せず、城を守りぬいた若い勇将もある。竹田の岡城主志賀親次と佐伯の梶牟礼城主佐伯惟定の

二人がそれで、豊薩戦の花とたたえられている。以下この二つの戦記をひもとこう。

高城をはじめ竹田周辺の諸城を攻略した島津義弘の軍は、最も堅固な岡城攻撃にかかった。まず島津に内応している入田宗和を使者にたてて降伏を勧告させた。

「望みのない大友家に、いまさら何の忠節ぞ。人質を出して島津と和議を結めば、兵を損せず領民も安泰である。いかに堅固な城といえども、包囲されれば支え難い」

と、宗和は、しよせん勝ち目のない抵抗の無益を説いたが、若い志賀親次は聞く耳を持たなかった。

「この城が薩摩の手で攻め落とせるものなら攻めてみてもらいましょう。豊後にも齒のたたぬ城が一つや二つはあることを、お見せしましょう」

と、宗和ら使者を送り返した。

⑧ 岡城の若武者

——二度の攻撃はね返す——

島津軍の降伏勧告を一蹴（いっしゅう）した岡城主志賀親次は、このとき二十歳の若武者であった。親次の父は、入田宗和に誘われて島津に内応した志賀道益である。道益は不始末があったとして大友義統の勘気をこうむり、嫡子親次に家督を譲って蟄居（ちつきよ）したのが天正十二年（一五八四）。親次はこのとき十八歳であった。

親次の妻は、先の日向遠征のさい戦死した田北鎮周（しげかね）の娘である。親次は熱心なキリシタンとなり天正十三年に

は府内の学院で洗礼を受け、ドン・パウロの教名を受けており、宗麟を尊敬していた。妻ものちに受洗してマグダレナと称した。

島津の総攻撃を受けて立つ

た親次は、島津に内応した父との間に、どのような対話があったのか。その心境は複雑であったことだろう。

親次が強気の姿勢をくずさないのは、難攻不落の岡城守備に自信があったからでもある。それほど岡城の構築は強固なものであった。のちに九州を鎮圧した関白秀吉は「われ大軍をもつて攻め取らんには、薩州十日、肥後八日、以外は三日仕事と思いに、この岡城を取ることは、あなどりがたし」と言ったと伝えている。

また江戸時代に、豊前、豊後を旅した地理学者古川古松軒は『西遊雜記』に「かねて聞きおよびしより嶮城（けんじょう）にして眼を驚かせしなり、海内三嶮城の最上と称せるもむべなり―その嶮なる事は壁に登るがごとく、一人万卒を制するといひしはかかる所の事ならん」と述べて、岡城に驚嘆している。島津義弘も、攻め取ることは容易でないと感じて和談を持ちこんだわけだが、あっさり断られた。そこでまず周辺を制圧したあとに、じっくり構えて攻めることにし、点々と存在する出城を各個撃破で落とした。

また兵を三隊に分け、六千余を玖珠郡、四千余を大野郡方面の攻略に差し向け、あと一万五千余が岡城へとって返し、十二



月二日から本格的な攻撃を開始した。

岡城の南、片ヶ瀬の原に島津軍は陣を敷いた。ここからだ、城の裾（すそ）をめぐるっている大野川にかかる滑瀬（ぬめりせ）橋を奪えば城にとりつき易（やす）いと考えたのだ。

岡城側もそれを予知して、川岸近くに保塁（ほるい）を設け、狙撃隊を配置して待ち構えた。それとは知らぬ島津勢が、どつと集中攻撃を決行すると、銃口がいつせいに火を吹いて一兵も寄せつけない。

『両豊記』の「岡城合戦之事」によると、十二月二日から五日まで、薩摩側は新手を入れ替えいれかえ攻めたが攻めきれず、数多の戦死者を出したとある。このため義弘は朽網へ引き退いた。

義弘は退くとき、稲富新助を将として五千の兵を、岡城監視のため残しておいた。これは岡城側の出撃を牽制（けんせい）する目的もあったのだが、稲富新助は功をいそいだ。預かった兵をもつて岡城を落とし、手柄をたてようともくろんだのである。

十二月二十四日未明に、兵千人に銃を持たせ、蛇渕（じゃぶち）の上にひそかに集結、暁暗の中を不意に滑瀬橋奪取の攻撃を決行した。

ところが岡城側は、この企てを事前に探知しておった。川岸正面に、銃口をそろえて待ち伏せていたのである。また別の一隊は川を迂回（うかい）して敵の背後を衝（つ）いたのだ。裏をかかれた稲富隊は大損害を受けて敗走した。二度目の岡城攻撃もこうして失敗した。

二度も手痛い目にあわされながら、島津義弘は岡城攻撃をあきらめようとしなかった。南山城、山野城、三舟城など朽網方面の攻略をすませると、再び陣を取って返し、岡城前面の大口や滑瀬橋などに主力を展開した。

年は明けて天正十五年（一五八七）二月二十八日、島津勢は、狼煙（のろし）を上げて決戦をいどんだ。

志賀親次は、砦（とりで）の上からこれを見下ろし、かたわらに控えた右田中務をふりむいてつぶやいた。

「豊後を攻め取ろうという大きな賭（か）けに出た島津殿が、わずか千人で守る岡城一つを落とせんようじゃ話になるまい。それでしつこく攻めたてるのじやろうが、負けてやるわけにはいかん」

⑨ 鬼ヶ城の決戦

— 矢文送り戦場を問答 —

志賀親次は言葉をつづけた。

「私は内、心恐れを抱いておったことがある。それは薩摩側に味方した私の親父殿を降伏勧告の使者に立てたり、親父殿の命と引き替えに降伏を迫ったりの、戦場の正義に背くことをされるのではないかと。だがさすが薩摩の武人よ。それをせず正面から堂々と戦いを挑んでおる。見上げたものよ。そう思わぬか——」

「御意のとおりにござります」。

右田中務は答え、この覇気あふれる若い主君は、敵を前に何か考えていることがあるのではないかと思い、「で…向こうの

狼煙（のろし）に対して、どのように応じましょうや」

「それよ…」

親次は楽しげな口調で言った。

「薩摩勢と雌雄を決するに良い戦い場所を考えた。いつも同じ滑瀬（ぬめりせ）口での撃ち合いでは向こうも面白うあるまい。鬼ヶ城に迎え入れて、あそこで戦ってみたい。敵も戦いがあろう」

鬼ヶ城は岡城の丘陵の続きで、玉来川が大きく曲がって大野川本流に合流するあたりの左岸にあり、岡城の支城である。右田ら家臣たちは、本城の備えよりはるかに劣る支城での合戦に不安を感じたが、親次は「必ず勝つ」自信を示した。そして次のような矢文を射送った。

「滑瀬口は、これまでの合戦で承知されたであろうが、川は深い。すでに橋を除いてあるので、決戦には不向きと存ずる。

明日この川の上流小渡牟礼（おどむれ）の渡しに陣を移されれば、当方から川の瀬踏みをして案内つかまつり、鬼ヶ城で勝敗を決すべくお待ち申す」

瀬踏みとは、徒歩で流れに入り、渡りやすい瀬を示すことである。これを読んだ島津方から、同じく矢文で返答が来た。

「鬼ヶ城での合戦、承諾した。小渡牟礼（おどむれ）の渡しを



瀬踏みで案内されることはまことに神妙に存ずる」

道義もすたれがちな戦国時代末期に、このような矢文で決戦場所の問答をする古武士のごときゆとりは、特記すべき戦場マナーだ。翌日、島津の大軍は指定の場所に移動していった。親次も自ら鬼ヶ城下の上角（うわすみ、魚住）口に本陣を定め、要所に将士を配して迎撃の体勢を整えた。そして雑兵十六人を出して、敵の面前で川の瀬踏みをし、渡河地帯を示した。

瀬踏みを合図に、待ち構えた島津軍は、どつと瀬を押し渡った。岡城側は敵が渡り終えるまで攻撃を控えた。島津軍は鬼ヶ城の丘陵を、潮の寄せるように、ひしひしと敵陣に迫って行った。

志賀勢は三段の構え、先陣後陣の陣形で、三方より迎え討つべく、なりをひそめて敵を引きつけた。敵が傾斜地の半ばまで押し登ったとき、親次の采配（さいはい）でどつと攻撃に出て、激戦となった。

攻め上る島津勢に対して、少数ながら地の利を知って攻め下る志賀勢が有利である。たちまち島津勢は態勢が崩れて押し落とされた。川にはまる者、あるいは阿蔵（あぞう）の民家に逃げかくれる者、玉来や松本、吉田に逃げ走る者など散々の敗軍であった。

この合戦で志賀勢は島津勢の甲首（かぶとくび）を三百七十討ちとつたと『大友興廃記』に記している。

島津義弘は、この敗戦にこりて、再び岡城攻撃を企てることはなかった。

志賀親次は、岡城を守り抜いたばかりでなく、岡城周辺の、

島津軍が占拠している支城や小さな砦（とりで）に出撃して、これをも奪い返している。

岡城の西約八キロのところにある支城駄原城は家臣朝倉一玄が守っていたが、島津勢に占拠された。親次は城兵を送り猛攻をかけて島津軍を追い出した。また駄原城からさらに四キロ先の篠原目城は家臣阿南惟秀が城番であったが、島津軍にいつわって城を明け渡し、親次の援軍を得て城に火をかけて島津軍を敗走させた。

また緒方庄の柏野、高尾、小牧の三城も島津軍に攻め取られていたが、親次はすぐに兵を送って、柏野と小牧の二城を奪い返している。

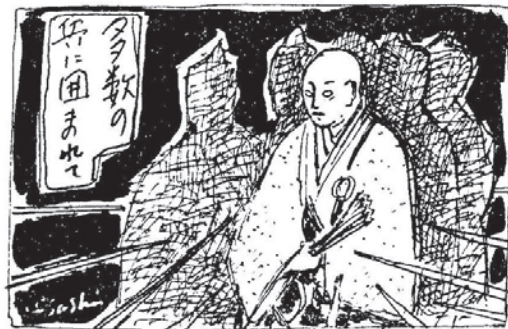
⑩ 榑牟礼城の攻防

—— 和睦はねのけ、使者殺傷 ——

日向口から侵攻して、三重郷松尾山に本陣を置いた島津家久の軍は、三重近郷の諸塁や緒方の出城、野津城などを制圧して、府内攻めの足場を固めていった。

十月二十三日には、佐伯地方も手中に収めるべく、佐伯惟定（これさだ）の守る榑牟礼（とがむれ）城に、陣僧玄西堂を降伏勧告の使者代表とし、供の兵十九人を付けて派遣した。

戦場の軍使に僧を使うのは異様に感じるが、学識に縁遠い戦国の武將は、自己の無知を補うために高僧智識を尊敬して教えを受け、あるいは学僧を常時側近に置いて意見を聴いたり、文章の用を弁じさせたりしている。僧を軍使に派遣するのも、穏やかに相手を説得するのには、武骨な武者よりも僧が好適とし



て選んだのだ。また僧なら、まさか殺しはしまいと考えたのだろう。

使僧玄西堂は、梶牟礼城の支城のある堤内（ひさぎうち）川と番匠川の合流地点、切畑（きりはた）で警護の兵に捕まった。「薩摩方の使僧一行を留め置いてある」との注進が本城に入った。本城では、城に案内するほどのこともあるまい、と重役が切畑まで出向いて対面した。

「当国に討ち入られた島津殿には、諸方の城主と和睦（わぼく）を結んでおられます。梶牟礼城の惟定公におかせられましても、和睦の御同心をいただけますなら、流血の惨もなくお互いに安泰である。御決断賜りますよう、愚僧が使者になった次第です。この旨殿へお伝え願いたい」

と戦うことの無益を説いた。

重役の報告を聞いた惟定は、ただちに重臣会議を開いた。このとき惟定は十八歳の若武者であつた。

惟定の祖父惟教（これのり、宗天）は、先の日向遠征、第一次の土持討伐では先鋒（せんぼう）として松尾城を攻め、落城後は城番として日向に在国。さらに第二次侵攻の日向高城合戦に従軍し子息惟真（これまさ）、鎮忠（しげただ）と共に壮烈な戦死をとげた。惟定は惟真の子で、十歳にして父亡きあとの家督を継いだ。大友軍敗戦のあと、日向の

島津与党の水軍が、連年のように佐伯の諸浦を襲ったが、有能な家臣の補佐のもと、よくこれを撃退するなど苦労をしている。

「惟定は大友家を裏切めることは断じてしない。それに島津は戦死した祖父、父、叔父のかたきだ。あくまで戦いたいと思うが、皆の意見を聞かせてほしい」

家臣たちは、お家大事を第一にして慎重論を説く者や、主戦論をとなえて譲らぬ者などがあつて会議は決着がつかない。このとき、奥の部屋から惟定の母が出てきて、一同の面前にぴたりと座ると、強い語気でいった。

「先ほどからあちらで聞いていましたが、敵の誘いにのつて迷つてはなりません。惟定の所存こそもつともなことです。戦うほかにありません。敵が多勢寄せて、もし勝てぬならば、惟定は切腹、この母も自害いたしましょう。未練の心があつてはなりませんぞ」

一同は返す言葉もなく、会議は和睦に応じないことに決定した。そして、使者一同を斬（き）つて、佐伯の不拔の決意を島津に示すべきであるということになった。僧であるからといって遠慮することはない。軍使として敵中に入る以上は、斬られる覚悟は持っているはずである、というのだ。

使者一同は番匠川原に誘い出され、伏せておいた多数の兵に囲まれて斬られたが、一人だけ水練の達者な武者が淵に飛び込んで逃げ帰ったという。

島津家久は、派遣した玄西堂らが斬られたと知ると、直ちに土持親信、新名親秀らを将とする日向、薩摩連合の兵二千余を佐伯討伐に出陣させた。

これに対して佐伯勢は、梶牟礼城にろう城する待ちの姿勢をとらず、敵の侵入する道に陣をしいて、迎え討つ戦法をとり、切畑口、堅田口、因尾口などの各塁を固めた。

⑪ 堅田合戦の勝利

—— 地の利を生かして奇襲作戦 ——

島津勢は、宇目より直川へ軍を進め、玄西堂らが斬（き）られた切畑口への道を避け、堅田口に通じる吹原峠を越えて轟に着陣したのが十一月三日であつた。

轟は大越川の上流にある。大越川は番匠川の下流近くで堅田川と合流し、番匠川へ流れこんでいる。このあたりが堅田口だ。ここからだと梶牟礼（とがむれ）城へは、かなりの回り道である。主要な出城を潰（つぶ）していつて本城梶牟礼へ迫る戦法であつたのか。

翌四日、島津勢は岸河内村の民家に火を放ち、土持、新名両将の率いる主力は、府坂峠を越えて堅田川沿いに下り、別の一手は大越川沿いに泥谷口、下城へと下って行つた。

堅田口の防御陣を、二方から衝（つ）くつもりであつた。しかし二手とも川沿いの道を、長蛇の陣型で進む不利な態勢となつた。

この付近の村には、薩摩軍と佐伯軍の合戦にまつわる種々の伝承が、いまでも語り伝えられているが、その一つに次のような話がある。

—— 侵入して来た薩軍が、岸河内の近くに差しかったとき、川沿いに「時の石」という大きな岩があり、その上に一人の山

伏が昼寝をしていた。薩軍がその山伏に尋ねた。

「ここから城下までどのくらいあるか」

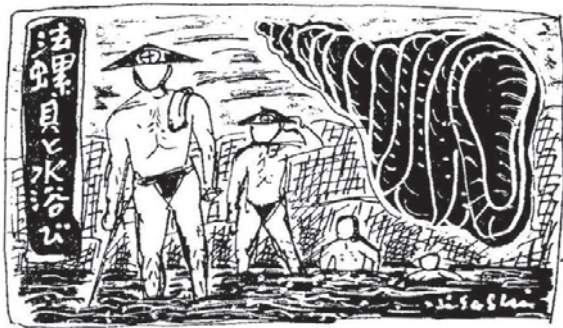
「まだまだ遠い道のりだ。ここらで水浴びでもし、ゆっくり汗を洗い流して行ったらどうだ」

それもそうだな、と薩軍の大將以下は、流れに入って汗を流し、休憩をとった。するといつの間にか姿を消した山伏の吹く法螺貝（ほらがい）が遠くで鳴りひびいた。さてはあの山伏は薩軍の侵攻をさぐる諜（ちよう）者であったか。油断はならぬ、とあわてて軍装をととのえて進発。岸河内の民家にいっせいに火を放って乱行をはたらいた。――

佐伯方は、軍略に長（た）けた山田土佐入道匡徳（きようとく）を軍師として、堅田川と番匠川の合流点近くの中山峠に本陣を置いて島津の陣の動きをにらんだ。

軍師山田匡徳は、日向の伊東義祐の臣であったが、伊東氏が島津に領地を奪われて豊後に逃れたさい供をし、佐伯氏に身を寄せていたのである。

佐伯勢の兵力は千八百余。敵の先鋒が下城、汐月あたりに達したとき、どつと攻撃の火ぶたをきった。じゅうぶんに知り尽くした地形を利用して兵を伏せ、鉄砲のいっせい射撃、矢ぶすま、あるいは槍（やり）をふるっての不意の襲撃など、奇襲作戦を駆使してせめたてたからたまらな



い。堅田川沿いの島津の主力は、長谷、宇山、波越へとじりじりと後退し、ついに府坂峠へ逃げ込んだ。

大越川沿いの軍も、泥谷、岸河内へと敗走し、これも府坂峠へ追い上げられた。こうして島津勢は府坂峠に集結して、陣の立て直しを図った。

佐伯勢は、この機を逃すなど、息つく間を置かず府坂峠追いつき落としにかかった。島津勢は反撃に出て激戦となったが、退勢は挽回（ばんかい）できず、大越川を渡り、長瀬原に敗走、ここが最後の決戦場となり、島津軍は大敗北した。やがて日も暮れたので、佐伯勢は深追いせず、杵牟礼城へ凱旋（がいせん）した。

島津軍は、番匠川の上流、因尾口からの侵攻も企てたようだが、この方面の佐伯守備軍は、穴圀砦（現本匠村井ノ上）にこもって奇襲し撃退した。この砦は、容易に登れない断崖上にある洞窟を活用した要塞であった。島津軍はここで阻まれて侵入できなかった。この因尾口は、その後も、ここを通過して、日向方面から連絡に北上しようとする島津の兵を捕らえるので、この道の通過は断念したという。

島津家久の佐伯攻めは、佐伯惟定の強固な防備戦に負けて終了し、ついに本城である杵牟礼城での直接の矢合わせはなかった。それは本城を取り巻く出城群が整備され、用兵が巧みであったからだと評価されている。

島津の大軍に対して、一步も退かずこれを撃砕した若武者、杵牟礼城の佐伯惟定と岡城の志賀親次は、戦後関白秀吉からも激賞され、豊薩戦にさわやかな話題を残した。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「豊後の武将と合戦」 第十四章●島津軍の豊後侵攻 ②

2008 年 9 月 5 日初版発行

著者 渡辺 克己

原著 2000 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社

／制作：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

(〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

© 大分合同新聞社、渡辺克己、菅久

◇著者略歴◇渡辺克己
大分県佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、芸芸部の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十三年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。